



女院
徳子の恋

榛葉英治
shinba eiji

女院徳子の恋

一九九二年七月三十一日 一刷

(定価はカバーに表
示してあります)

著者 榛葉英治

発行者 田村祥蔵

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五

電話代表(〇三)三二七〇―〇二五―
七一〇〇―六六振替・東京三一五五五

印刷所 楠デイテ

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の際はお取り替えます

© Eiji Shinba 1992

Printed in Japan
ISBN4-532-17023-0

目次

一章	栄華への階	7
二章	女の世界	27
三章	秋の夜語り	47
四章	驕る人	72
五章	英雄誕生	96
六章	孤独の皇后	110
七章	父と子	135

八章 栄華の果て 148

九章 流浪 163

十章 滅亡の海 177

十一章 彦島の一夜 190

十二章 吉田の里 214

十三章 源平の子 235

十四章 頼朝怒る 249

十五章 呪い 265

十六章 法皇大いに笑う 286

十七章 逃避行 312

十八章	寂光院		332
十九章	松の木は倒れた		358
二十章	徳子菩薩		377
	あとがき		387

装幀……川上成夫・こやまたかこ
装画……岡田嘉夫

女院徳子の恋

一章 栄華への階きざはし

一

京都の六波羅は平家の本拠であり、清盛の館を中心に、平氏一族の壮麗な邸いらかが薨いを並べている。清盛の父の忠盛が伊勢から出て、北面の武士として御所を警固したときに、この六波羅蜜寺を宿所にしたのが初まりで、館が建つまえには一帯が寺の墓地であった。その勢力が強まるにつれて、広大な土地に六波羅館やかたができた。

平家の繁栄を象徴する中心である。

六波羅館には平家の政庁や武者所むしやしろ、武器庫、厩うまやなどがあり、家族の住居には向かないので、十年前の応保二年（一一六二）に、清盛は西八条に寝殿造りの優雅な別邸を造り、妻の時子と六人の娘を住まわせた。子息たちはそれぞれの屋敷か六波羅にいる。

寝殿の北ノ対屋たいのやには、時子の居間があり、姫たちには東と西の対屋にそれぞれの居間があたえられた。広い庭の池には、透殿すいどのを渡って池につき出た釣殿や、中島に架けた反り橋もある。姫たちはこの庭を遊び場にして育った。

承安元年（一一七一）の春の頃である。

この西八条の別邸の奥の間では、清盛と時子の夫妻が、久し振りにくつろいで、夕餉ゆうけをとりながら話していた。

清盛は、この日に福原（神戸）から帰ったのだ。彼はこの海辺の土地に宋貿易のための大がかりな築港工事をし、邸宅のほかに町造りも急いでいる。

清盛は宋から渡来した酒を飲みながら、妻の酌を受ける。侍女をさがらせた夫婦は久し振りに水入らずで話した。

盃をおいて、清盛がとつぜんに訊いた。

「奥、徳子はいくつになつたかの？」

「徳子が生まれたのは、保元ほうげんの戦さのあつた年ゆえ、よく覚えております。あのときには、あなたが出陣なされて、もし討ち死にでもなさつたらと気が気でなく、私はお腹の子のことなぞ、構つてはおれませんでしたよ」時子は指を折つて数えた。「さよう、数え十五になります。鬢びんそぎ枇し（女の成人式）の祝いをしなければと考えておりましたの」

「そうか。年頃じゃな。時子、わしは福原から、よい考えを持つてもどつたぞ。だが、これはまだ館では、あれのきょうだいにも、女どもにも、誰にも話してはならんぞ」

「はて、どのようなお考えでございましょう？」

白の法衣を着た浄海入道（清盛）は円座のあぐらを坐り直して、真剣な顔になった。

「徳子を入内じゅんだいさせるとのことじゃ」

「まあ、入内といえ、徳子みちこを帝のお后に？」

「そうじゃ」

「でも、帝はまだおん年十一歳のほんの童子……時忠の話では、蹴鞠に夢中なそうで、お后のことなぞ考えてもおられますまいに……」

時子の弟の時忠は、宮中で中宮職の権亮（次官）をしているので、時子も宮中のことは詳しい。

清盛は妻の言うことには耳も貸さない。

「齢などどうでもよいわ。二、三年すれば、立派な男子になれるわ」

「でも、わたくしが心配なのは、徳子のほうが四つも年上で、夫婦の仲がうまくゆきますかどうか……？　いくつになっても、齢の違いは埋められますまい」

「さては、そなたも女よ。いらざる心配はせぬことじゃ」

「もうひとつ心配なのは、帝がひ弱なことです。法皇さまもご心配とか……」

「くだい！　つべこべ申すな。これは清盛がきめたことぞ。女どもの反対は許さぬ」

入道は額に青筋を立てたが、言葉をや柔らげた。

「もうひとつ、そなたに言い置きたいことがある。そなたの弟は、祝いの席で酒にくらい酔って、平氏にあらざれば人にあらざるなどほざきおったそうな。わしは忘れてはおらんぞ。時忠のこの思い上がった高言に、わしは苦い思いをしたわ」

彼は妻に向かって、言葉をつよめた。

「よく聞け。この平家の繁栄は、あの時忠が築いたと申すのか？　この清盛ぞ。時忠は何をしたというのじゃ？　一門の誇りは、この清盛が担うべきものじゃ。このことは、姉のそなたにもよく覚えておいてもらいたい」

良人の激しい言葉に、時子は身の縮む思いがした。清盛の話すことには一理がある。二歳年下の弟の思ひ上がりには、時子も苦しい思いをしてきたのだ。

「だが、考えてみれば、時忠の言い分には道理もある。妹の滋子が国母になったことよ。時忠はその子憲仁親王を帝位につけようと企みおって、上皇のお怒りを買ひ、出雲に流されたのは、十年前のことじゃ。それが今は、帝の外戚というので平閑白なぞと言われおって、このわしをさえ、下目にみようとしておる。

時子、よく聞くがよい。わしは徳子を入内させて、帝になる男子を生ませるのが願ひじゃ。このことを考えて、急ぎ都へ上ったのじゃ。

そなたから、わしの考えを建春門院につたえてほしい。頼んだぞ」

建春門院とは後白河法皇の後で、時子の妹にあたる滋子のことである。

旅と長話に疲れたのか、入道相国（清盛）は横になってイビキをかき始めた。

侍女を呼んで、寝所に送ると、時子は切灯台の灯心をかき立て、ひとりでも思ひに沈んだ。つぎの帝の外祖父になろうとする夫の清盛の果てしない権勢欲には、妻の身としても不安と恐れとが起こる。その犠牲になる徳子が哀れでもある。

対屋にいる姉妹の姫たちや侍女も寝たのか、寢殿造りの邸のなかは静かだ。

西八条のこの別邸には、四人の姫が住んでいる。上の二人は嫁いで、下の四人が残った。脇腹の長女で花山院兼雅に嫁いだ昌子は今年二十三歳、二、三女の盛子、佑子は双子で十七歳、摂政閑白近衛家に仕える女房の藤波局と清盛とのあいだに生まれた娘である。姉の盛子は時子が育て、佑子

は東山の麓の吉田の尼寺に預けられていたのを、九歳のときに引き取った。盛子は同じ齡の九歳のときに、関白藤原家の嫡男で二十一歳になる基実^{もとざね}に嫁がされた。基実の妻は平治の乱を起こした藤原信頼の妹であつたので、離婚されたのだ。清盛はこの家の侍女に生ませた娘を、当主に嫁入らせたというわけだ。基実は結婚三年後に病死したので、白川殿と呼ばれる盛子は十一歳で未亡人になつた。盛子は滋子の生んだ後白河法皇の五男の憲仁親王^{のりひと}の乳母^{めのと}になり、皇后に次ぐ准三后の地位になつた。

いま、西八条の邸にいるのは、脇腹で盛子の妹の佑子と、時子が生んだ十五歳の徳子^{かしろ}を頭に、五女の寛子^{ひろこ}と末娘の典子^{のりこ}で、三十を出たばかりの時子は女ばかり三人をたて続けに生んだのである。

この娘たちの教育には、時子の計らいで、世尊寺伊行夫妻^{これゆき}があつた。書道で名のある家柄の伊行は書道と文学を、妻の夕霧は雅楽寮の楽人の家の出なので、笛と琴とを教えた。文学と音楽の血を両親から受けた一人娘の奈々は、少女のときから和歌の才をみせている。

もう一人、大江広元という若い学者が、漢文と支那の古典を教えた。広元の曾祖父は漢学者の大江匡房^{まさふさ}である。

この娘たちは母の時子に似たのか、そろって美貌で、成人を迎える今、母、時子の考えることは、娘たちの嫁ぎ先であつた。

それでも徳子を従弟^{いとこ}にあたる高倉帝の后にとは考えたこともなかったのだ。

月影の映る庭の池を眺めて、時子は深い溜め息をついた。

「さ、心をきめましょ」

自分の腹を痛めた最初の娘の徳子のことを考えると、時子は物思いから覚めて、明るい顔になつ

た。

「あの徳子を後に……。わが殿はよいことを考えて下さった。明日は忙しいことよ」

時子は燭を手にも夫のいる寢所の方に長い廊下を渡っていった。

入道頭の清盛は旅の疲れか、大イビキをかいている。時子も床に入ったが、今夜の話を考えて、なかなか眠れなかった。

二

つぎの日に、時子は網代の女房車一台だけのお潜かづびの形で、後白河法皇の院の御所へ行った。法住寺にあるので法住寺殿とも、仙洞御所ともいわれる。皇居や六波羅館に対して、法皇が院政を行なう重要な御所である。東山山麓から大和大路にかけた広い土地に、院の庁、諸役所、守護の武者所などの建物が並び、寝殿造りの御所の庭は遠景に東山や森をいれ、鴨川の流れを引いた池には滝もある。六波羅は西北の内裏と東南の院の御所とをつなぐ中間にあつて、さほど遠い距離ではない。

御所には、法皇の寵愛の深い建春門院滋子も住んでいる。時子の十四歳年下の腹違いの妹である。

潜かづびの訪問なので、時子は御所の中門の車寄せて牛車ぎゅうしゃを降りると、庭を廻って、滋子の居室のある北ノ対屋へ行った。女房に軽く挨拶をしただけで、滋子のいる居間に通された。

姉の突然の訪問を不審な顔で迎えた門院に、時子は挨拶抜きで話した。

「今日は、お方さまに内々で申し上げたき話があつて参りましたよ」滋子は東の御方とも呼ばれている。「これは入道殿のお言いつけでもございます」

「はい、お姉上、うけたまわりましょう」

「実は徳子を入内させる話です。これは入道殿のきつい望みで、ぜひともそなたのお力を借りたいとのことですよ」

滋子の美しい顔には驚きとためらいとが浮かんだが、それは喜びの波紋に消された。

「徳子姫の入内は、わらわもかねがね考えていたこと……。でも、法皇さまのお許しがあるやら、迷っていましたの。わらわの子と、姉君の子とを娶めとわすのは、何よりの吉事と存じます」

「清盛の考えも、そのことですよ」

「承知いたしました。わらわより、折をみて、お上の御意向をうかがつてみましょう」

「でもなあ、滋子……」時子は妹に話すくだけた呼び方になった。「私には心配がひとつあります。それは二人の齢のことですが、これは時がたつのを待つとしても、帝が年上の徳子をどのようにお迎え遊ばすか、徳子はあのとおり、おっとりとしたたちで、自分の好き嫌いはつきりとは言わぬ。私にも言葉あやうなで、はいとか、いいえとか言うだけです。

それにくらべて、姉の佑子は母親の藤波局に似たか、はきはきとしていて、琴の上手じゃ。学問もようできるそう。徳子にも琵琶や琴を習わせたのに、いっこうに気が乗らぬ。歌の道も同じです。帝は、笛がお好きなそう。

入内しても、夫婦の仲はうまくゆくものかと思つてな」

「ほほ、姉上としたことが、苦労性な。男女の道は異なるものと申します。当人どうしに任すよりは

かはございますまい。わらわも姉上から十四も上の上皇さまのおそばに上がるようにと言われたときには、人身御供になる思いでしたもの」

「まあ、私のこの心配は取り越し苦労というものであろう。帝はおすこやかにおすごしですか？」

「はい、兄上の話では、この頃、馬にお乗り遊ばして、内裏の庭じゅうを乗り廻しておられるそうで……」

「ほう、あのおとなしい帝が、お馬を……。それはよいことじや。その凜々しいお姿を拝見したいものですな。」

では、お方さま、よろしく頼みます。私はこれから、時忠に会いますので……」

「おそらく、兄上もこの話は喜ぶでしょう」

「さあ、どうだか……」

昨夜の清盛の話を思い出した時子は、浮かぬ顔になった。

御所の正門へ向かうときに、御座所の方から笛や琴に合わせて、今様を歌う声が聞こえた。後白河法皇のきたえた歌声と、白拍子らしい女の声である。

遊びをせんとや

生れけむ

戯れせんとや生れけん

中門の車寄せに待たせた牛車の方へ歩きながら、時子は眉をひそめてひとり言を言った。

「あの法皇さまも困ったお人よ。遊びとか、戯れとかを唄にしていなさる……」